

ことは、胃がんの治療効果を向上させる上で非常に重要です。今後も臨床的意義のある胃がん化学療法薬の薬剤耐性メカニズムに関する研究を行っていきたいと思います。

この度は貴重なご支援を賜りまして、重ねて御礼申し上げます。



熊本大学大学院医学教育部
修士課程1年（がん代謝学）

張 子楊

修士2年生の学生、張子楊です。私は中国で生物科学の学士号を取得し、令和4年10月に熊本大学に入学して修士号を取得するための学業に専念しています。現在は「がん代謝学」に関連する研究を行っています。

医療技術の進歩と社会福祉の向上に伴い、人類の平均寿命は延びていますが、がんは未だに克服が難しい疾患の一つであり、完璧な治療法が確立されていません。がんは人体の遺伝子変異によって引き起こされる疾患であり、がんを治療するにはこれらの遺伝子の研究が極めて重要です。私が行っている研究はこの範疇に属しています。特定の遺伝子が特定の生理条件下でどのように発現が調節されるかについての研究を行うことで、その遺伝子によって引き起こされるがん細胞内の生理過程を推測し、その理論に基づいてがんのターゲット治療法を見つけることができます。この過程は長く、研究者、さらには各研究室の成果はがんの複雑さと比較して些細なものに思えるかもしれませんが、これらの努力は依然としてがん治療への道を開拓するための基盤です。

そのため、ここで肥後医育振興会から授与された奨学金に感謝したいと思います。研究の過程は単調で長いものですが、この奨学金は私の実験や目標に対する励ましと認識です。今後も努力を続け、医学研究への貢献を続けていきます。



熊本大学大学院医学教育部
修士課程2年（分子薬理学）

李 ジョ然

この奨学金を授与していただき、大変光栄に思っております。日本での研究に全力を尽くしたいと考えております。この機会に、奨学金を活用して行った研究について簡単にご紹介させていただきたいと思います。

慢性炎症性病態において、傷害と組織修復の進展に重要な役割を果たすマクロファージの機能を調節する要因として、鉄代謝の意義が指摘されている。従来、鉄代謝がマクロファージ機能を調節する分子メカニズムの解析は、培養マクロファージに鉄剤や鉄キレート剤を処理し細胞内鉄量を変容させることにより行われてきた。しかしながら、この方法は、数時間以内に急激に細胞内鉄量を変化させる実験系であるため、慢性炎症における長期的な鉄代謝変容の影響とは乖離している可能性が否定できない。そこで今年度の研究では、慢性的に細胞内鉄量を増加（FBXL5欠損）、あるいは、減少（IRP2欠損）させたマクロファージ細胞株を作製し、鉄剤あるいは鉄キレート剤により急性に細胞内鉄量を増減させた場合と比較することで、鉄代謝がマクロファージ機能に及ぼす急性の影響と慢性的な影響の違いを明らかにする。本研究成果は、種々の慢性炎症性疾患の病態形成メカニズムの理解にも貢献が期待される。



熊本大学大学院薬学教育部
博士前期課程2年（創薬・生命薬科学）

韓 磊